

MfG_J_Talk_to_guests_about_Uonuma

1 魚沼関連のとおきのお話

- (1) 「西福寺開山堂の雲蝶さんの彫刻
- (2) 雪国の雪
- (3) 新井石禅師と雲洞庵
- (4) 坂戸城
- (5) 大黒天、恵比寿天
- (6) 修験

2 富岡惣一郎とトミオカホワイト

- (1) 代表的な白絵の具
～ 油絵具のジンクホワイトと、古くからの鉛白
- (2) トミオカホワイトとは
- (3) なぜ白土が候補にならなかったか
～ 美術館展示の数種類の比較チューブを見て
- (4) 彼が悩んだ問題点とは
- (5) 絵画の堅牢性

3. トミオカホワイトの補足

- (1) 「画家を代表する色」の話
- (2) 横山操と雪景色

1 魚沼関連のとおきのお話

雲蝶彫刻、トミオカホワイト美術館、雲洞庵、上田長尾氏の拠点、浦佐毘沙門堂など

(1) 「西福寺開山堂の雲蝶さんの彫刻

鰻絵の河上伊吉は、鰻絵修行の行脚の中、西福寺開山堂に何度も足を運んだと言われています。道元の虎をも諭す姿を見て、鰻絵にも感動的なストーリーが欲しいと願い、当主と話し合ったに違いありません。それが鰻絵東面の火防祈願・地域安泰、北面、南面、更に内側の家業継続・商売繁盛テーマとなった、と考えます。私は、ガイドのとき、いつもゲストに、「西福寺開山堂の雲蝶さんの彫刻、ご覧になったことがありますか」、とお聞きします。既に開山堂を見ておられるお客様は、大変喜び、話が盛り上がります。(もちろん三条からのお客なら、本成寺と多くの塔頭寺院の作品も、欠かせない問いかけです。)

また、道元さんと虎の間に、道元さんを守るように龍がいます。サフラン酒の守護神の龍と、同じ意味だと思います。

(2) 雪国の雪

トミオカホワイト美術館の雪景色の作品に、普段見る雪(昨今の、克雪後の雪景色)と違った「雪」を感じる学生さんもいるはずです。雪国の雪は、圧倒的なキラコンテンツだと思います。美術館の作品と絡めた話も可能と思います。二色に限った色彩の大画面の花火の絵も。

(3) 新井石禅師と雲洞庵

サフラン酒の離れの一階に、初代当主にあてた、石禅師の書幅があります。新井石禅師は、南魚沼市雲洞庵で方丈を勤め、永平寺の住職代理などを経て、大正9年(1920年)に曹洞宗第11代管長となった、大変な高僧です。吉沢家の菩提寺が同じ曹洞宗の定正院ということで、当主と石禅師の交流があったのですが、魚沼屈指の名刹、雲洞庵の話をするのも、いいと思います。

雲洞庵(うんとうあん)は、南魚沼市雲洞に所在する曹洞宗の古刹です。本尊は釈迦牟尼仏。南魚沼郡一帯にあたる上田庄に位置、最盛期には直末27寺を有する越後有数の大寺院であったといわれています。

後に越後国主となる上杉景勝やその家臣である直江兼続が幼少期に、通天存達(第13世住職・上杉景勝の実父である長尾政景の兄)らより勉学を学んだ寺としても知られています。。

(4) 坂戸城

六日町の坂戸城は、上田長尾氏ゆかりの城として知られており、長尾政景や上杉景勝の居城として名高い大規模な山城です、 戦国時代、越後全域が、上杉氏の動向により、大きく翻弄されたこと、その他、上杉家に関する話題も、あると思います。

(5) 大黒天、恵比寿天

鰻絵蔵の内部、旧事務所入口の大黒天、恵比寿天は、七福神のメンバーです。 浦佐毘沙門堂の毘沙門天も、七福神の中にいます。招福の神である七福神として、大黒天、恵比寿天とともに、武神でもある毘沙門天のいわれを説明するのも、いいと思います。

裸押合祭は日本三大奇祭の一つとも云われています。三大稲荷同様、上位の二つは、有力な祭りがあるようですが、三番目が何かということで諸説あります。 毘沙門堂裸押合祭りを三番目としたトップスリーを話すのも、日本の古くからの民間信仰、民俗宗教に関する話題として、とても面白いと思います。 尚、謙信公は毘沙門天に帰依していたことから、この毘沙門堂も信仰の対象とし、篤く庇護していたとのことでした。

(6) 修験

八海山尊神社との繋がり、山岳信仰、村松・大峰山の話もいいのでは、と思います。

摂田屋多しのと東山修験道の関わりとしてお話すれば、八海山尊神社の火渡りと修験道の話も、関心をもっていただけたと思います。

大学から離れていますが、湯沢と摂田屋に絡めて、川上四朗さんも、ゲストに関心があれば。

2 富岡惣一郎とトミオカホワイト

1922年 新潟県高田市(現上越市)に生まれ、新潟県立高田商工学校卒
 1960年 三菱化成工業広告宣伝部門に勤務のかたわら独力で絵を学ぶ
 1990年 新潟県六日町(現南魚沼市)にトミオカホワイト美術館開館
 1994年 5月31日死去(享年72歳)

(1) 代表的な白絵の具 油絵具のジンクホワイトと、古くからの鉛白

・ジンクホワイトは、青味のある寒色系の白として知られています。

油絵具にすると、亀裂や剥離などが起こし易いため、地塗りや、塗り重ねる可能性のある塗膜への使用には向かないとされているが、上塗りには、愛用されている絵の具です。

人間の目には青味がある白をより白く感じるという習性があるので、色としては純白に近いイメージになります。この為、雪を表すのに適しているホワイトといえます。

ジンクホワイトは比較的歴史の浅い色で、18世紀後半に初めて作られました。日本語では亜鉛華(あえんか)と言います。化学的には酸化亜鉛の事を指します。

・鉛白(えんぱく、White Lead)は古代から使用されてきた白色顔料で、組成は塩基性炭酸鉛 塩基性炭酸鉛 $2\text{PbCO}_3 \cdot \text{Pb}(\text{OH})_2$ です。硫黄化合物と混合すると黒変の可能性があります。水性絵具では硫黄成分を遮断できない為、水性絵具には適さず、且つ毒性があるので、長期にわたる皮膚などからの摂取には注意が必要です。

(2) トミオカホワイトとは

トミオカホワイト美術館 > お知らせ > トミオカホワイトとは より転載

「トミオカホワイト」は、富岡惣一郎が専門家の協力を得て開発に取り組み、1964年に長く品質の保たれる製法を発見し、製造された白い油絵具の名前です。1950年代後半、雪を描こうと決意した後、富岡は、当時の白い絵具が、1年もたたないうちにひび割れ、剥落、黄変することに落胆しました。「世界中の油絵の具を取り寄せてみたが黄変しない油絵の具は、どこにもなかった。だれも雪の油絵を描こうとしないわけである。考えた末、東大の教授をはじめその道の技術面の人たちに相談した。

思い切って研究してみてももらえまいか、とおねがいをした。ぼくの熱意にこたえてくださる何人かがあり、研究が進められていった。出来た絵の具にはいちいちナンバーがつけられ、それぞれに配合の仕方を添付して、持ち込まれて来た。ぼくは早速、大キャンバスに試してみるが、黄変しないものは、必ずハク離・亀裂が出てきた。そんな繰り返しが一年半か二年はつづいたであらうか。とうとう、だれもが「これはダメです。不可能です」「今まで世界じゅうになかったわけがわかりました」と、サジを投げてしまった」(昭和五十六年(一九八一年)十一月十六日 新潟日報(夕刊)より)と、開発当時を回想しています。それでも富岡はあきらめませんでした。

ある日、アトリエに遺された試作品を開けて、分離して層になった底の絵具を試してみました。(春日追記・展色剤の変更) このことがきっかけで、劣化しにくい白絵具の製法を見つけ、「トミオカホワイト」として、世に知られることとなりました。現在、この絵具は製造されていません。

絵の具名	顔料	展色剤	乾燥補足
チタニウムホワイト	酸化チタン	ケシ油	やや遅い混色制限あり
シルバーホワイト	炭酸鉛	ケシ油	早い毒性あり
パーマネントホワイト	酸化チタン	ケシ油	やや遅い混色制限なし
ジンクホワイト	酸化亜鉛	ケシ油	遅い津塗りは剥離

(3) なぜ白土が候補にならなかったか ～ 美術館展示の数種類の比較チューブを見て ～
 古来からの白色顔料として、白土が知られているが、富岡惣一郎といえばシルクスクリーンであり、富岡惣一郎の頭の中では、選択肢になかった。どうも、シルクスクリーンに適さない、白土は念頭になく、油彩系で、色味として最適なジンクホワイトの欠点克服が、最優先だったと思います。狙いは、速乾性で厚塗りにも耐える展色剤の発見では、と予測しています。
 linseed oil, poppy oil, toxicity, white clay

(4) 彼が悩んだ問題点とは

彼が悩んだ問題点は、まさに、油絵での代表的な白の絵具と溶き油であるジンクホワイトとリンシードオイルの欠点です。当時は、油絵具の品質も今ほどではなく、対策も周知されていなかった時期であり、新しい絵具の開発に長い年月を割いたのも、已むを得なかったと思いますし、そういった時代に、他者に先駆けて新しい絵具にこだわったところに、彼の凄さがあると考えます。

新しい色彩、描き方といえば、面相筆という細い筆の墨で外形を描く日本画の技法を取り入れつつ、油彩画に独自の「乳白色の肌」とよばれた裸婦像の色を作り上げた藤田嗣二が、その代表かも知れません。

近年の日本画では、奥田元宋画伯の燃えて輝くような山の赤、東山魁夷画伯の霊性の棲むような山の青、などなど、画家を代表する色彩として知られています。

トミオカホワイトも、そのような「色」のひとつとして評価されるようになると、うれしいのですが・・・。

(このホワイトは、見た目の美しさではないので、今は評価がそれほど高くないとも言えますが、しかし、油絵の命は、意外と短いのです。350年前のフェルメールをはじめオランダ絵画黄金時代の絵画はもちろん、150年前の印象派の絵画にも、近年、ひび割れが目立ち始めています。美術館が管理している油絵で、数十年前の絵といえども、早くも補修が必要なものが出始めているのが実態です。それを考えると、富岡惣一郎とトミオカホワイトも、二百年後に、白色が全く変色せず、ひび割れ割れしない大画面ということで、再評価されるのかも知れません。

尚、日本画の顔料は、1000年以上、環境変化に耐えるとも、言われています。

サフラン酒の鰻絵も、日本画の顔料同様、無機質のみですから、1000年後も残るのでしょうか。)

現在は、油彩、水彩とも絵具の種類が多く、更にアクリル絵具を含めて、驚くほど多種多様な新画材が販売されていますが、トミオカホワイトが本当に優れておれば、製造が中止になることはないと思います。惣一郎が門外不出を願ったか、需要喚起に至らなかったか、どちらかと予想していますが、中止の真相を知りたいです。

(5) 絵画の堅牢性

(このホワイトは、見た目の美しさではないので、今は評価がそれほど高くないとも言えますが、しかし油絵の命は、意外と短いのです。350年前のフェルメールをはじめオランダ絵画黄金時代の絵画はもちろん、150年前の印象派の絵画にも、近年ひび割れが目立ち始めています。美術館の管理下にある油絵で、数十年前の絵といえども、早くも補修が必要なものが出始めているのが実態です。それを考えると、富岡惣一郎とトミオカホワイトも、二百年後に、白色が全く変色せず、ひび割れ割れしない大画面ということで、再評価されるのかも知れません。

尚、日本画の顔料は、1000年以上、環境変化に耐えるとも、言われています。

サフラン酒の鰻絵も、日本画の顔料同様、無機質のみですから、1000年後も残るのでしょうか。)

現在は、油彩、水彩とも絵具の種類が多く、更にアクリル絵具を含めて、驚くほど多種多様な新画材が販売されていますが、トミオカホワイトが本当に優れておれば、製造が中止になることはないと思います。惣一郎が門外不出を願ったか、需要喚起に至らなかったか、どちらかと予想していますが、中止の真相を知りたいです。

ボッティチェッリ、ダ・ビンチの テンペラ画の名作が相次いで大修復され、かつての色彩を取り戻したことがニュースとなりましたが、 テンペラ画は、油彩画と比べると、堅牢と言われておりますが、温度変化には弱いとされています。

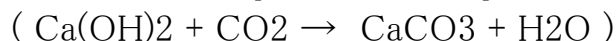
フレスコ画は、即乾という制約があるものの、テンペラ画より、さらに堅牢です。

ミケランジェロの天地創造の美しい色彩が保存されていることは、ご存知の方も多いと思います。

鰻絵は、フレスコ画の堅牢さと原理は異なるものの、同じような堅牢さがあると思います。

製作後の漆喰が、水分の蒸発と空気中の炭酸ガスの吸収により、いわゆる漆喰壁という、丈夫な層に変化するというプロセスは、鰻絵、フレスコ画とも共通であることから、鰻絵は、フレスコ画と同じような堅牢さがあると思います。

Evaporation of water component and absorption of carbon dioxide gas



近年の、ボート上に岩絵具、胡粉で描かれる日本画は、温度差にも強いと言われており、フレスコ画、鰻絵と同等の保存性と思います。

3. トミオカホワイトの補足

(1) 「画家を代表する色」の話

数年前に亡くなられた、奥田元宋という、日展理事長もつとめられた日本画家がおられます。「元宋の赤」という言葉があります。画伯の燃えて輝くような山の赤、ちょっとニッチな比較で済みませんが、私の好きな錦鯉の中の緋昭和やブラチナ昭和三色の、金色に輝く濃い赤のような感じの色を思い出させる色です。



奥田元宋展（富山県立近代美術館）
のカタログ表紙
日本経済新聞社 2002-2003



緋昭和
大森松男著、「錦鯉図鑑」、
池田書店(1976)より

(2) 横山操と雪景色

横山操の越後風景を代表する、大きな作品「雪原」では、横山の故郷の蒲原平野の冬景色が描き出されています。

この風景は、後年の「越路十景」中の「蒲原落雁」へと展開することになりますが、この「雪原」は暗い冬空と地面の描写にたらし込みを多用しながらも、濃墨と淡墨とを交えた硬質な描法による無数の稲架木(はざき)が主要モチーフとなって、横長の画面を活かした左右への広がり、奥行への志向とを持った風景画になっています。

「蒲原落雁」は、これはもはや越後風景のシンボルだと思います。